
IS 白き翼の思い

柏崎 棗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 白き翼の思い

【Nコード】

N0435W

【作者名】

柏崎 棗

【あらすじ】

IS学園に転校してきた主人公、櫻井悠莉
ばーっとしている彼女が何かを引き起こす……？

アブノーマルなプロローグ（前書き）

プロローグです

先に補足しておきますと、場所は一夏の部屋です

とりあえず、変な世界ですがいつてらっしゃいます

アブノーマルなプロローグ

PM 19 : 00

『俺が——ガンダムだ!』

「……………」

「……………」

がさっ、……………ばりぼり。

……

PM 21 : 00

『デュナメス、ロックオン・ストラトス。目標を狙い打つ!』

「……………む。ねえ織斑君」

「え、何?」

「コンソメ味」

「……………」

「どしたの?」

「……………自分で取ってこいよ」

「……………それもそうね。よっこらせ」

ぴっ。

トットトット……がさがさっ……………トットトットッ。

ぼふっ。

がさがさ……………ばりっ……………。

ぴっ。

PM 22 : 30

……

「ふう、まだまだ先は長いなー……。んんっ」

「ぴっ。ウーーン……。ぱっ。かちっ。」

「がさがさっ。すたっ。」

「それじゃね、織斑君。また来るよ」

「あ、ちよつと待ってくれ」

「？」

「一つだけ聞いていいか」

「なに？」

「あんた誰？」

.....

がちゅっ
……
ばたん。

アブノーマルなプロローグ（後書き）

おかえりなさいませ。どうでしたか？

とりあえず一夏と…… もう一人

もう一人が何をしていたのかは、効果音から想像してみてください

感想とかあると励みになりますー

一話（前書き）

一話です

いろいろ説明不足なプロローグを乗り越えた皆さんにのみ見えたりする一話です

……それでは、いってらっしゃいませ

一話

AM 8:40 IS学園1年1組教室

「今日からお世話になります。転校生の櫻井悠莉です。どうぞよろしく……ふわぁ」

「自己紹介中に欠伸をするな櫻井」

「寝不足なもんで」

眠い……

昨晚遅くまで〇〇なんか見るんじゃなかった。とりあえず二期の中盤までは見たけど、気づいた時には朝日が登場。私絶望。

のんびりと準備をした後、途中にコンビニへ寄ってサンドイッチを購入。食べ歩きながら登校したところを織斑女史に見つかり殴られつつも、大まかに学園についての説明を受けて今にいたる。

「はいはいしつもん」

「？」

「どうして白衣なんか羽織ってるんですかー？」

白衣。というのはおそらく私が制服の上から袖を通してあるこのことだろう。150cm代である私にはかなり大きく、床に着いてしまいそうだ。袖もダボダボで、腕を伸ばしきっても指先が少し出る程度。オマケにお世辞にも純白とは言えないし、私しか分らないがオイル臭も染み付いている。

「あー……私のパーツの一部だと思ってくれれば」

「は、はぁ」

納得いつてなさそうな感じをした女子生徒だったが、先生が睨みを利かせているのか深くは追求してこなかった。こちらとしてはそれはそれで助かる。

「もう質問はないな？　　というか、休み時間にやってくれよ。それでは櫻井。お前の席は……」

「あ、先生。それに関しては希望が」

「ふむ。……前のほうがいいか？眼鏡を掛けているし、前の奴と相談して……」

「いえ、前は前なんですけど」

私は少しずつ落ちていた大きな目の眼鏡を掛け直し、一人の生徒のほうを向いて言った。

「織斑君の隣を」

[illegible]

!!!

絶叫。

国際的なクラスの女子高生達は、息が合つと計り知れないパワーを放つらしい。また一つ勉強だ。

にしても今のはちよつとビックリした。耳痛い……

……って、織斑君にいたっては机に突つ伏してるよ。やはり耐性は低かったようだ。

「だめだめだめ！ 絶対だめだよっ！」

「そうそう！ 転校生だからって抜け駆けは許さない！」

「むしろ私が隣になりたいくらいよっ！」

それにしてもこれはマズイ。今後の生活的にもこの状況を打破しなければ。

「あ、あの〜」

「「「「「なにっ!?!」「」「」「」

クラスほぼ全員の睨みに少し震えながらも、私は声を絞り出す。

「な、な〜んちゃって。あは、ははは……」

……
……
……

「だよねえ」！！！！

……乗り切った。

P M 1 : 1 0 I S 学園食堂の一角

「いただきます」

昼時。結局一番後ろの席になった私は午前中の授業を難なくこな
し、合間の休み時間にやってくる質問攻めに実に社交的な応対をし、
コンビニでついでに昼ごはんも買ってこればよかったという後悔を
抱きながら食堂を初訪問。無難な定食を注文し、適当な席について
のんびりと過ごそうとした……

「……」

「食べないのですか？」

「いや、食うけど」

……したところに、噂の織斑一夏君が一人でうろうろしていたの

で捕獲したところ、彼もまた私を探していたとのことなので同席することに。何の用だろうか。

織斑君は中華そば（二つ）の片方を手にとって啜り始めた。やはり男の子。食べる量は私よりも多い。

「で、織斑君は私に何か質問でもあるんですか。ちなみにスリーサイズは教えません」

「聞かないよ！」

「あれ、おかしいな……思春期男子なら誰もが知りたくなる情報なのに」

「返答に困るんだけど……」

「もしかしてそっち系ですか」

「違うよ!？」

「……………」

「その残念そうな顔を止めてくれると嬉しい」

織斑君はホモじゃないことが証明されました。ちくしょう。

「で、話を戻すけど。昨日は何で——」

「またまた奥さんご冗談を」

「いやまだ何も言っていないし。奥さんじゃないし」

「昨日……夜……………ぐすっ」

「え、お、俺なんかしたか……？ その、悪い」

「いえ、全く何もしてないので謝罪の必要は皆無です」

「悪魔か！」

「美少女だっ！」

「何故か反論された！」

織斑君はぜえぜえと呼吸を整えながら、コップの水を喉に流し込んだ。忙しい人ね……

「話を戻すぞ……はあ」

「……まあ、満足はしたので答えます」

「どうして昨日の……夕飯時か。俺の部屋にいたんだ？」

「誠に勝手ながら、不法侵入ですが何か」

「どうやって？」

「……」

私は白衣の内ポケットをまさぐると、木製の小箱を取り出した。

「それは？」

「ぱっぱらっぱっぱっぱらっぱっぱー。ぴっきんぐせつと」

「なんちゅうもんを持ってるんだ……」

「これ一つでカードキーも鍵穴もダイヤル式も怖くないぜ 的な感じです」

「はあ……とりあえず方法は分かった。それと、あのDVDは？」

DVD……ああ、OOのこと。

「持ち込んだの。私の家にあるやつをね。部屋に入ってる間にすることが無いだろうと思ったので。結構面白いよ。貸りる？」

「いや、遠慮しとく」

「あ、そう……」

「……ポテチ等に関しては？」

「あれも持ち込み」

「……」

織斑君を見ると、あまり気持ちのよい顔はしていなかった。確かに、会ったことも無い知らない人間が勝手に自分の部屋に侵入して好き勝手やられていたら、誰だって気持ちのいいことではないだろう。

そうは思っているけど、あの時は半分仕方が無かった状態なのだ。詳しい経緯は……あまり思い出したくない……

そんな私の考えていることは知るよしもなく、聞かれるとちょっと困る質問を彼はぶつけてきた。

「どうして俺の部屋に？」

「……」

「……勝手に入ったりすることはいけないことだけど、今回は誰かに迷惑をかけてたってわけじゃないからその辺は目をつむる。もしかしたら何か理由があつたんじゃないか？　とも思うし……理由だとしても教えてくれないか。あの時、俺の部屋にいた理由を」

……　ちよつと驚いた。

織斑君は意外にも私を許してくれた。いや、ただのお人よしののかも知れないけど。

だが彼はちゃんと私が侵入したことに理由があると思っているし、それをしっかりと聞いてから結論を出すつもりでいるようだ。

……

「全部は話せないけど」

「別にかまわないぞ？」

「逃げてきた」

「……………え？」

予想外の言葉だったのか、織斑君はキョトンとした顔をした。まあ、過程を話していないのだから当然なのだが。

「……………」
「……………」

お互い沈黙。こういう間はあまり好きじゃない。

「織斑君」

「え？」

「昼食。早めに食べたほうがいいよ。ごちそうさま」

私はそう言うと、なんだかんだで食べきっていた定食のトレーを持ち上げ、その場を後にした。

一話（後書き）

おかえりなさいませ。どうでしたか？

感想、アドバイスがあっただけだと嬉しいですよー

オリ主説明（前書き）

一話書く前にやれよって話ですね。分かります

オリ主説明

櫻井 悠莉 (さくらい ゆうり)

性別 女

年齢 一夏達と同年

身長 154cm

体重 40kg代

スリーサイズ 秘密。決して良いとは言えない。でもBはあるんじゃない？

性格 温厚&怠慢&純粹に変

IS学園に転校してきた女生徒。専用機も持っている。常にサイズの大きい眼鏡を掛けている。髪の毛はショートヘア。あまり整えてないため、所々、寝癖のようにはねている。

常に白衣を纏っている。着ていないと落ち着かないらしい。千冬は何故か黙認している。

運動能力は著しく低いが、頭脳はなかなか明晰。

特にISに関することは束にも匹敵する。コアの作り方を唯一理解してしまっただけ。

趣味はDVD鑑賞。特に機械物に関しては、自分の専用機に使える

ものがないか常に探している。ちなみに恋愛物の耐性はあまり高くないため、濃厚なものを見るとバテる。

オリ主説明（後書き）

随時更新してきます
専用機についても書かなきゃ
……

機体説明（前書き）

今後も追加するかも

Wikiもかなり参考にしました。ガンダム兵器でもIS用なので、
脳内変換していただければ

機体説明

型式番号 XXXG-00W0

正式名称「Wing-ZERO-00-custom」

呼称「OOウイング」

搭乗者 櫻井悠莉

世代型 名目上第三世代

待機状態 ネットレス

悠莉が専用機として作ったIS

モデルとしてはEndless Waltz版ウイングガンダム

ゼロカスタムの装甲をISに当てはめた感じ

翼は二対四枚

ウイングゼロカスタムのビジュアル+OOライザーの性能みたいな？

高スペックな機体を制御、安定させるために、OOガンダムのツインコアドライブシステムを応用。粒子の名前は一応「GN粒子」

太陽炉搭載型に改造したコアを二つ使うことで、機体の動作が可能になる

これにより機体の推進力、飛躍能力、攻撃のためのエネルギーを無制限に生成することが可能

機体稼働中は、エネルギー粒子が四枚の翼から多少漏れ出している。無限に生成できるエネルギーを蓄えすぎた状態だと、内部爆発を引き起こす可能性があるためその防止

基本的に武装はウイングゼロのものを一通りモデルにしてあるが、前述の通りエネルギー源は太陽炉のため、〇〇シリーズの「GN」などの仕組みを応用してある

武装

・ツインバスターライフル

2挺のライフルを平行連結した2連装型バスターライフル

1挺で使えばシールドエネルギーの大半を削ることができ、2挺に分割して別方向へ同時射撃を行ったりすることも可能。出力を調節して連射性能を高めることもできる

最大出力での使用はISの耐久力を大幅に上回るが、使用者への負担が激しいため、一日に一回しか満足して使えない

・ビームサーベル×2

接近戦用の斬撃武装。柄の形状や大きさは一般的に装備する物と変わらない

改良を加えたビーム発生装置の耐久性が大幅に向上しているため、桁外れの出力を持ち、水中でも一切減衰せず使用可能

・マシンキャノン×2

両肩に内蔵された4銃身式機関砲。発砲時は肩口の装甲が展開し銃身が露出する。基本的に牽制や近接防御が主用途である。ツインバスターライフルとは違い実弾兵器であるため、弾数に制限がある

特殊な能力

・トランザムシステム（TRANS・AM）

二つのコアから生成された高濃度圧縮粒子を全面開放すること
で、一定時間スペックを3倍以上に上げることができる

終了後はエネルギーの再チャージまである程度機体性能が低下
する

使用中は翼から放出する粒子の色が赤くなる

IS用に作られたシステムなので制限時間は長いが、一度の起
動中に二回目を行うことはできない

ワンオフ・アビリティー

????

機体説明（後書き）

これ変じゃね？ とか、これは入れねえのかよ！ とか意見、感想があつたらよろしくお願いしますー

ウイングはまだまだ疎いんで……

〇〇はある程度理解してあるんですけどねw

二話（前書き）

すっかり言い忘れてました

この物語は七月頭から始まってるんで、鈴とかシャルとかラウラとかの件は一気に飛ばしてます

合宿にはまだ行ってません。まあそのうち

二話

P M 4 : 2 7 I S 学園 1 年 1 組 教室

午後の授業も難なく終わり、荷物を鞆に入れてさあ下校……と言つても、寮に戻るだけなので下校と言えるのだろうか。

まあそんな素朴な疑問は置いておいてと。

周囲を見渡すと、帰る用意をする人もいれば、これから部活動だと意気込む人もいる。授業のからの開放感がこれほど出ている瞬間は他にないだろう。各々がそれぞれやりたいことをする時間。この辺はいたって普通の学校と変わらないかな。

「あ、櫻井さん」

「どうも」

教室を出たところで私に声をかけてきたのは、副担任の山田真耶先生だ。おっとりした性格に少し大きめの眼鏡が特徴。背もそんなに高くないため、鬼こと織斑先生とは対称的な存在だ。

そう思うとこの人はなかなか私と似ている点がある……せめてもの違いといえば、先生の鎖骨下にある核弾頭二つくらいか。歩く凶器とはまさにこのこと。

「転校初日でいろいろ慌しかったと思いますけど、どうですか？」

「問題なくやっていけそうですよ」

「それはよかった。困ったことがあったら、何でも言うてくださいね」

「……それなら一つ、質問いいですか」

「は、はいっ。なんですか!？」

山田先生が途端にレンズ奥の瞳を輝かせ始めた。頼られるのとか好きそうね……

「山田先生はいつも何食べてます？」

「え、食事ですか？ …… 普段から食べたいなあと思ったものを、それなりに食べるだけですけど」

「はあ」

「それがどうかしたんですか？」

「いえ。先生は健康面とかに気を使っていそうだったから、気になっただけです」

何したらそんな核弾頭を二つも生み出せるのか気になったというのは伏せるが。

「健康面…… そうですね、よく食べてよく寝ること。だと思いますよ」

「やっぱりそんなもんですか」

「そんなもんです」

山田先生はえっへん。と言わんばかりに腰に手を当てて胸を張っていた。その際、ちゃんと揺れていたのを私は見逃さなかった。

…… あれ、何だろっこの敗北感。

P M 7 : 1 5 I S 学園食堂

部屋に戻った後軽くシャワーを浴びて、少しゴロゴロしてから食堂へ来た。

さて、今日は何にしようかな……

「ちょっと、よろしくて？」

背後から声がしたので振り返ると、一人の女子生徒が笑顔で立っていた。長い金髪……日本人じゃならしい。

……何故だか凄まじいオーラを感じる。

「何か？」

「いえ、大した用ではございませんの。少しお話をお願いまして」「結構です」

よく分からないが、あまり関わらないほうがいい雰囲気を感じたのでそそくさとその場を退散。

したかったのだけど……

「まあまあ」

「へっ？」

いきなり肩を捕まれたので振り返ると、金髪の女生徒意外にも『四人』増えていた。

どうしてみんな笑顔でいるのかは謎。

……

逆らわないほうがよさそうね……

……

「あの一」

「何だ」

「手錠はないんじゃない？」

結局任意同行を強制させられて、食堂の奥のほうの席へと連行。何故か身体を自由を奪われた後、私の右側にツインテール女子、左側には銀髪ロングの外人さんが座る。

目の前には金髪ショートヘアの女子が私を見据え、その左には先ほどのロングな人がいる。右側にはポニーテールの女子。彼女は日本人だろうか。

周囲からも奇異な現象に見えるのか、行く人々の微妙な視線が突き刺さる。何なんだ一体。COP10でもするんですか。それとも公開裁判ですか。

「脱走しないよう、念のためだ」

「どここの警察ですか」

「ドイツ軍人だ」

「マジの人だった」

クラスメイトは軍人でした。IS学園は恐ろしいところだった。

「えっと、それじゃあ単刀直入に……」

前に座る金髪ショートさんが話を切り出そうとする。だが私はそれに賛同することはできない。

何故なら……

「話をするのはいいけど、その前に一つ」
「何？」

「君たち誰？」

「……え？」

五人が同じような反応をした。あれ、なんかまずいこと言ったかしら。

「し……知らないんですの？ わたくしたちのことを？」

「ばっちり知りません」

「……」

金髪ウェーブの彼女から気が抜けた感じがした。それをショートヘアの彼女が慌てて対応しつつ、私に向けて――

「ま、まずは自己紹介からしょうか……」

と言った。実に親切な誘拐犯だなと思った。

「イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットさん。セシリアって呼ばせてもらおうかな」

「かまいせんわ」

「中国の代表候補生、鳳鈴音さん。鈴って呼んでいい？」

「いいわよ。まあ、私は知らなくても当然か……クラス違うし」

「フランスの代表候補生、シャルロット・デュノアさん。シャルロットって呼ぶわ」

「わかった」

「ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒさん。ラウラでいい？」

「問題ない。ちなみに階級は少佐だ」

「そして日本の一般IS学生、篠ノ之箒さん。箒でいいかな」

「ああ」

「五人合わせて、通称『一夏ラバーズ』」

「「「「何で知ってる！？」「」「」」

「え、そうなの！？」

「「「「しまったっ！」「」「」」

適当に言ってみたのだがまさか本当にそうだったとは。

……待てよ？

と言うことは、私がここに呼ばれた理由は……

「……もしかして、昨日の会話見てた？」

「「「「「ギクッ」「」「」」

「……」

実に分かりやすい五人だった。

「あ、あのね？ 別に覗いたとか、そういうんじゃないって……ただちょっと気になったっていうか」

シャルロット、必死の弁解。これはチャンスだ。

「そうよねー。好きな男の子が別の女と話してたら気になっちゃうよねー」

「い、いやー……………あはははは」

「ふふふふふ」

……………ニヤリ

「で、他の四人は？」

「わ、私は……………その、たまたま」

「わたくしもですわっ。ちよつと聞こえてきただけですわ！」

「そうよっ、たまたまよ！」

「……………偶然だ」

「あらそう。たまたま偶然……………」

……………

「昨日織斑君は何を食べてたか知ってる？」

「……………中華そば……………」

「よく見てるじゃない」

「……………しまったっ！……………」

意外とみんなアホだった。

まあそんなことはいい。別に聞かれて困る内容でもなかったしね。でもせっかく代表候補生五人の秘密を知ったことだし、もう少し遊んでみようかな……………

……………そうだ。

「……………あのさ、何話してたか知りたい？」

「教えてくれるのか！？」

「食いつきいいわね……別にいいけど、ただ教えるのも面白くないでしょ。だから、私と勝負して勝ったら教えてあげる」

「勝負？」

聞き返してきた鈴に、私は少し口角を上げて提案する。

「そう。勝負はISを使つての模擬戦。先に私のシールドエネルギーを0にしたらそっちの勝ち。逆に私が五人のシールドエネルギーを全て0にしたら私の勝ち。ってのはどう？」

「ちょ、ちよつと待ってよ」

私の提案にシャルロットが静止をかけた。それはそうだろう。今の条件では明らかにおかしいはずだから。

「それって、一体五で戦うってこと？　いくらなんでも……」

「心配ないわ。負けないもの」

「なっ……」

私の挑発にそれぞれが反応したようだ。もう一押ししてみよう。

「逆に五人がかりで倒せなかったら、代表候補生の名が廃るよね？」

「……」

「別に一対一でもかまわないけど、無理しなくていいからね」

五人とも黙って考え込んでいる。だが先ほどよりも——闘志というのだろうか——オーラがにじみ出ているのが分かった。

「……分かった。乗ろう」

「そこまで言われたら、負けるわけにはいかないね」

「代表候補の力を見せてあげますわ」

「一対一で勝ってやるわよ！」

「久々に、本気でぶつかれそうだ」

やる気を出し始めた五人に、再び私は提示する。

「それじゃあ明日の授業が終わった後、第3アリーナに集合で。許可は取っておくから」

そういい残して私はその場を退散……するつもりだったのだが、もう一つやることがあるのだ。

「あ、そうだらウラ」

「何だ？」

「手錠、そろそろ解いてくれない？」

二話（後書き）

とりあえず二話です。いろいろ登場で次は戦います

いろいろと地の文が少なくてすいません。説明不足だったら文句ど
うぞ

感想、アドバイスあったらくれると嬉しいですー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0435w/>

IS 白き翼の思い

2011年9月29日16時58分発行